

基礎看護学実習における看護学生の対人意識

亀田 和 恵

Personal Relationship of Student Nurses in Basic Practice

Kazue KAMEDA

キーワード：看護教育，看護学生，基礎看護学実習，対人意識

概 要

基礎看護学実習を経験した看護学生105名（第一看護科—実習初心者50名，第二看護科—実習経験者55名）を対象に，実習中の対人意識に対する調査を行った。その結果，看護学生は臨地実習でのコミュニケーションを苦手と感じており，コミュニケーションでつまずきを感じた対象に対して苦手と感じる傾向がみられた。対象別では実習中のコミュニケーションでのつまずきは，看護スタッフと患者に対して強く感じているが，否定的な感情や苦手意識は看護スタッフに対してだけに強かった。また，コミュニケーションが順調であった対象には好意感情を持ち，逆につまづいた場合には嫌悪感情を抱く傾向があるが，患者の場合にだけ，コミュニケーションでつまずいても，順調と感じたときと同様に好意的に感じていることがわかった。

1. 緒 言

看護学生（以下，学生とする）にとって臨地実習は，多くの人々との関わりの中で，看護者としての成長発達をなし遂げるための貴重な体験のひとつである。しかしながら，対人関係によって生じる様々な感情から，実習に支障をきたす場合も少なくない。学生が人間関係論やコミュニケーション技術を机上で学び，その必要性を痛感していながら，実習では対人関係が大きなストレスとなることは先行研究により明らかである¹⁻⁵⁾。本稿では実際に臨地実習での経験から，学生が対人関係についてどのような意識を抱き，それが実習にどう影響するのかを明らかにするため，基礎看護学実習に焦点を当て，患者，担当教員，看護スタッフ，実習グループメンバー（以下，実習グループとする）を対象として選び，対人意識に関する調査を行った。その結果，今後の実習指導に役立つ若干の知見が得られたので報告する。

2. 研究方法

(1) 調査対象

川崎医療短期大学第一看護科2年生（以下，1Nとする）50名，第二看護科1年生（以下，2Nとする）55名を対象とした。平均年齢は1N19.7歳，2N18.8歳であり，1Nの学生では基礎看護学実習が初めての臨地実習である。2Nは准看護婦免許を取得しており，本学における基礎看護学実習前に他施設において平均約6ヶ月の病院実習の経験がある。

(2) 調査方法

自作の質問紙によるアンケート調査を行った。年齢や実習経験などのプロフィール，コミュニケーションの得意不得意，患者・担当教員・看護スタッフ（臨床指導者を含む）・実習グループの各対象の苦手意識を聞き，さらに各対象別のコミュニケーションにおけるつまずきとその時の感情を尋ねた内容である。回収率は100%であった。

(3) 調査期間

平成10年1月7日にアンケート用紙を配付し，同月9日に回収した。

(4) 分析方法

SPSS を使用し，有意差の検定には χ^2 検定を用い

(平成11年9月9日受理)

川崎医療短期大学 第二看護科

The Second Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

た。

3. 結 果

(1) 状況別コミュニケーションの意識 (表1)

まず学生がコミュニケーションをどう捉えているかを知るために、普段の生活 (以下日常とする) と実習中とのコミュニケーションにおける苦手意識を比較した。日常と実習との間に有意差が認められた ($P < 0.001$)。1 N, 2 Nの間では有意差は見られなかった。

(2) 対象別苦手意識 (表2)

実習中の患者, 担当教員, 看護スタッフ, 実習グループを対象として, 苦手意識を5段階に分けて尋ねた。看護スタッフに対してだけ1から3すなわち「苦手から普通」と答えた者が多く, 実習グループ, 担当教員に対しては3から5すなわち「普通から得意」と答えた者が多い傾向にあったが, 有意差は認められなかった。患者に対してはバラツキがあり, 一定の傾向が見られなかった。各対象において, 1 N 2 Nの間では有意差は見られなかった。

(3) 対象別つまずき体験 (図1)

学生が実習中にコミュニケーションでつまずきを感じ

じたのは, 看護スタッフに対してが最も多く, 次いで患者, 担当教員, 実習グループの順であった。看護スタッフに対しては1 Nと2 Nとの間で有意差が認められ, 1 Nの方が2 Nよりもつまずきの体験が多いことがわかった ($P < 0.05$)。

(4) 対象別の「好き・嫌い」感情 (図2)

各対象への感情を好きか嫌いかの二者択一で回答を求めた。好意的に感じているのは実習グループが最も多く, 次に患者, 担当教員, 看護スタッフの順となった。1 Nと2 Nの間では有意差は見られなかったが, 1 Nの方が2 Nよりも看護スタッフに対して嫌悪感情を強く抱く傾向が見られた。

表1 状況別コミュニケーションの意識

		得意	苦手	計
日常	1 N 人	31	19	50
	2 N 人	25	30	55
	計 人	56	49	105
		(%)	(%)	(%)
		(53.3)	(46.7)	(100)
実習	1 N 人	15	35	50
	2 N 人	20	35	55
	計 人	35	70	105
		(%)	(%)	(%)
		(33.3)	(66.7)	(100)

$p < 0.001$

表2 対象別苦手意識

		苦手 ←	普通	→ 得意			
対象/評価		1	2	3	4	5	計
実習グループ	1 N 人	1	1	15	16	17	
	2 N 人	0	0	18	20	17	
	計	1	1	33	36	34	105
患者	1 N 人	3	9	24	8	6	
	2 N 人	3	6	30	14	2	
	計	6	15	54	22	8	105
担当教員	1 N 人	3	2	23	15	7	
	2 N 人	3	4	27	13	8	
	計	6	6	50	28	15	105
看護スタッフ	1 N 人	21	18	5	5	1	
	2 N 人	16	17	16	6	0	
	計	1	1	33	36	34	105

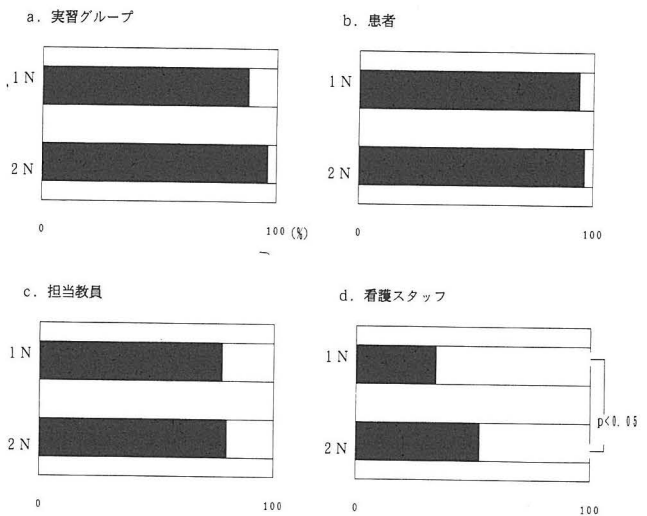


図1 対象別つまずき体験の内訳
■-順調 □-つまずき

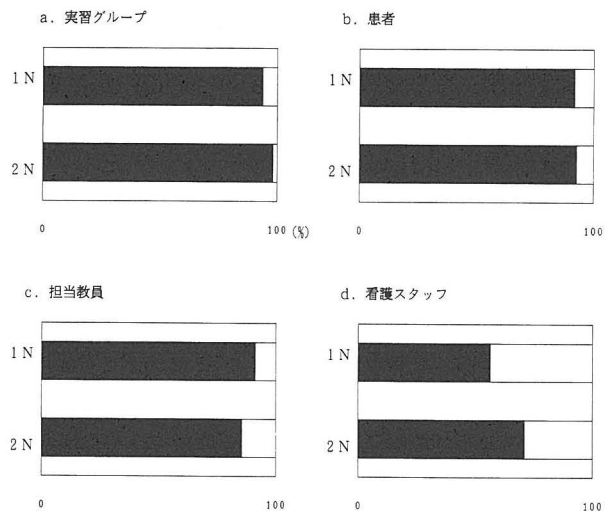


図2 対象別の好き/嫌い感情
■-好き □-嫌い

(5) 看護スタッフとのコミュニケーション意識(表3)

各対象との意思疎通の状況を具体的に尋ねたところ、看護スタッフとのコミュニケーションにおいてだけ、「自己の存在が認められた」と「自己の考えを表現できた」の2項目と($p < 0.01$),「看護学生としての信頼が得られた」「自己の対象者への対応に満足した」「自己の言動の意味を理解してもらえた」の3項目で($p < 0.05$) 1Nと2Nとの間に有意差が認められた。特に1Nの方が2Nの学生よりも看護スタッフに対して否定的な感情が強いことが明らかになった。

(6) 対象別コミュニケーションの意識(表4)

各対象の苦手意識とコミュニケーションでのつまずきの有無との関係を見たところ、四者ともつまずきを体験するほど苦手と感じ、順調に感じるほど得意とすることが明らかになった($p < 0.001$)。

(7) 対象別好悪感情とコミュニケーション状況との関係(表5)

コミュニケーション状況と各対象への感情を見てみると、患者以外の対象の場合、コミュニケーションが順調と感じれば好き、逆につまずいた場合には嫌いと感じている。しかし患者との場合は、たとえコミュニケーションでつまずいても順調と感じたときと同様に好意的に感じていることが明らかになり、調査した全対象において好意感情と嫌悪感情との間に有意差が認められた($p < 0.01$)。

4. 考 察

臨地実習で学生が関わる相手は患者ばかりではない。臨床指導者を含む看護スタッフ、患者の主治医、その他のコメディカル・スタッフのみならず、患者の家族との間にも関わりが生じる。人生経験の乏しい学生にとって、年代・環境の異なる人々と自らの責任において1対1で関わるという体験は、臨地実習以前には非常に少ないと思われる。中西⁶⁾は実習中の学生の状態を「心理的緊張状態」と述べているが、心理的緊張を伴う中での対人関係を、学生がストレスフルなものとして受けとめていることは十分に理解できる。

実習中のコミュニケーションが不得意と答えた者には、対象に対する苦手意識や実習でのつまずき体験および対象への好悪感情が大きく関与している。つまり、対象とのコミュニケーションが成立したという実感がなければ、実習自体に支障を来したと感じ、さらには対象へのネガティブな感情に繋がっていく。しかし、学生は対人関係における気掛かりが当面の看護とは関

表3 看護スタッフとのコミュニケーション意識

	はい(人)		いいえ(人)		1N/2Nの クロス結果
	1N	2N	1N	2N	
コミュニケーションで 喜びを感じた	17	29	33	26	n.p
対象者の対応に満足した	15	28	35	27	p < 0.05
信頼が得られた	18	34	32	21	
言動の意味を理解された	28	45	21	10	p < 0.01
存在が認められた	22	39	28	16	
考えを表現できた	15	31	35	24	n.p
コミュニケーションが 成立した	31	19	40	15	n.p

※n.p…有意差なし

表4 対象別コミュニケーション意識のクロス表
(数字は人数)

		苦 手 意 識					χ^2 検定
		苦手 ← 普通 → 得意					
		1	2	3	4	5	
実習グループ	順 調	0	1	26	36	34	p < 0.001
	つまずき	1	0	7	0	0	
患 者	順 調	2	4	38	19	8	p < 0.001
	つまずき	4	11	16	3	0	
担 当 教 員	順 調	1	3	37	27	15	p < 0.001
	つまずき	5	3	13	1	0	
看護スタッフ	順 調	6	14	17	8	1	p < 0.001
	つまずき	31	21	4	3	0	

表5 対象への好悪感情とコミュニケーション状況の関係
(数字は人数)

評価対象		対象への意識		χ^2 検定
		好き	嫌い	
実習グループ	順 調	96	1	p < 0.01
	つまずき	3	3	
患 者	順 調	69	1	p < 0.01
	つまずき	26	7	
担 当 教 員	順 調	79	2	p < 0.01
	つまずき	10	10	
看護スタッフ	順 調	43	2	p < 0.01
	つまずき	23	35	

係のない自分自身の内面の問題として受けとめ、自分自身で解決すべきであると考える傾向にある。学生自身の感情が対象へのアプローチの方法を規定してしま

い、学生の行動を束縛することによってより一層対象との対人関係をギクシャクさせるとの意見⁷⁾もあり、教員には学生と各対象との間に立って関わっていく役割が課せられる。

実習グループや担当教員との対人関係に対しては得意であると答えた者が多く、実習中のコミュニケーションでのつまずき体験も少なかった。これは、基礎看護学実習以前からの関わりによって担当教員に対しては自分を助けてくれる存在として、また実習グループに対しては同じ心理的緊張やつまずきを体験する仲間としての対人認識が成立していたからであろう。この結果は基礎看護学実習が本学で行う最初の実習であり、同じ教員がほぼ毎日つきっきりで関わっていることや、2または3週間という短期間の実習形態であるために生じたとも考えられる。今後長期間にわたる様々な部署での実習を行うときや、またその都度別の教員が関わるシステムになれば、また違った結果が生じることも考えられるため、比較して考察する予定である。

また、各対象によって、特に患者と看護スタッフの二者に対して、苦手意識とつまずき体験、好悪感情とつまずき体験のそれぞれのクロス結果が異なることにも注目しなければならない。両者に対しては、特に学生自身の役割意識が大きく関与していると考えられる。患者に対しては実習中にコミュニケーションでのつまずきを体験した場合、苦手な存在と感じていながらも、好意感情を抱いていることが判明した。これは患者に対しては、たとえ未熟であっても看護者という立場で接したいと思う学生の役割意識からの結果と考えられる。看護者としての役割意識から、患者を受容する姿勢で関わり、たとえ患者から拒絶されても向き合おうと努めるため、うまくいった場合には信頼関係が生じ、うまくいかなくても献身的な態度で接しようとするためだと思われる。

看護スタッフは患者と同じく、初めて学生が臨地実習で関わる対象である。しかし、看護スタッフに対しては苦手意識が最も強く、コミュニケーションでつまずきを感じることによって、嫌悪感情を抱くようになる。学生が看護スタッフと関わる際には、看護者としての自分への認識以上に、学生としての受け身的姿勢が加わるためだと思われる。学生は「看護者はかくあるべき」という認識を看護スタッフと同様に持っている。しかし、看護スタッフと比べて未熟な自分を痛感し、学生として指導を受けたいと思う一方、看護者として認められるように扱ってほしいという欲求がある。

1Nと2Nに好悪感情において差があらわれたのは、看護スタッフとの接触経験の有無の違いである。看護スタッフとのコミュニケーションにおいて、図1からもわかるように、有意差はあるものの肯定的回答と否定的回答にクラス差が認められる。2Nの方が看護スタッフとのコミュニケーションを肯定的に捉え、その理由として看護スタッフからの受け身的な内容が多いことが表3からわかる。つまり、看護スタッフとの積極的接触経験によって、自分という存在を受けとめてもらえる、認めてもらえるという実感が、実習に大きく影響されている。これらのことから、早期に看護スタッフと良い関わりを持ち、看護学生としての存在価値を見いだすような懇切な指導が受けられる環境が教員が作り得れば、看護スタッフへの嫌悪感情が軽減できると考える。

心理学の領域では「知る自分」が「知られる自分」を意識の対象として捉えることを<自己意識>といい、他者からのフィードバックを手掛かりとして、個人が自分自身に対して抱く感情を<自己感情>という⁸⁾。自己意識も自己感情も、本人が自分自身についてはっきりした像を描くことであるが、それらは自分が単独に描いたものではなく、他者との接触があって初めて発生するものである。

他者を通して見た自分をあらためて意識すると、理想の自分と現実の自分とのズレを、自分自身の評価によって気づかされる。このズレを直視することは、非常に厳しい試練といえる。何故なら、理想の自分に到達できないことを思い知らされ、自己嫌悪に陥りやすいからである。特に自己の可能性や、自己実現に対する欲求が高く、アイデンティティの形成において不安定な時期にある学生の場合は、対象を通して自分を見つめることで、自分自身のあり方をも否定された感情を抱く恐れは高いと考えられる。

しかし、他者との接触抜きでは成立し得ない看護において、自己意識や自己感情を活用していく必要は大いにあると思われる。看護者としての自立のためには、自己の振り返りを避けて通ることはできないのである。教員は対人場面での自己の振り返りの必要性を学生に示し、対象との関わりを通して学びを伴う体験をさせたいかなければならない。

そのためには対象との対人関係をスムーズにすることが不可欠であると感じる。学生のコミュニケーションでのつまずきをネガティブな感情へと移行させないために、自分自身のあり方を対象を通して振り返らせ、

臨地実習中に関わる対象に近づけるような教員の働きかけが、効果的な実習へと導く鍵になるのではないだろうか。

5. 結 論

- (1) 看護学生は実習中のコミュニケーションを日常生活のそれとは異なったものとして認識し、苦手と感じていた。
- (2) 基礎看護学実習中のコミュニケーションのつまづきは、看護スタッフと患者に対して強く感じているが、否定的な感情や苦手意識は看護スタッフに対してのみ強かった。また、はじめての臨地実習に臨んだ看護学生は、実習経験のある者に比べ、看護スタッフに対してより否定的な感情を抱いていた。
- (3) 看護学生は患者に対しては、たとえコミュニケーションでつまづいても、順調と感じたときと同様、好意的に感じていた。
- (4) 対象との積極的接触を通して自分を認めてもらえる体験が、看護学生の対象への感情を好意的に変化させていた。これは特に看護スタッフに対して強く現れていた。
- (5) 対象との対人関係成立のために、学生が自己を意識しその感情を整理することで、効果的な実習が行えた実感できるような、教員の働きかけが必要である。

6. 謝 辞

本稿を終わるに臨み、ご校閲いただきました第二看

護科原田種一教授、ならびにご指導いただきました岡山商科大学田中潔教授に深く感謝いたします。

7. 参考文献

- 1) 亀田和恵, 阪本みどり, 酒井恒美: 看護科学生の臨床実習におけるおそれとストレス反応, 川崎医療短期大学紀要14: 39-44, 1994.
- 2) 藤田美津子: 初めての臨床実習を前にした看護学生の不安—学習への動機づけとして—, 看護展望21(3): 98-108, 1996.
- 3) 鈴木啓子, 松下由美子: 看護臨床実習における行動計画発表のあり方についての検討—学生の不安傾向とストレス—との関連—, 日本看護研究学会雑誌18(2): 49-50, 1995.
- 4) 佐々木かほる, 齊藤 基, 中西陽子, 正田智子: 基礎看護実習における学生の不安についての研究—成績と状態・特性不安尺度(STAI)による検討—, 群馬県立医療短期大学紀要 3: 19-24, 1996.
- 5) 中西睦子: 臨床教育論—体験からことばへ—, 東京: ゆみ出版, p 63, 1992.
- 6) 中西睦子: 臨床教育論—体験からことばへ—, 東京: ゆみ出版, pp 104-105, 1992.
- 7) 中村陽吉: 対人場面の心理, 東京: 東京大学出版会, pp 11-12, 1983.
- 8) Leary, M.R.: Understanding Social Anxiety, Beverly Hills: SAGE Publications, 1983.
- 9) 見藤隆子: 人を育てる看護教育, 東京: 医学書院, 1994.
- 10) I・J・オーランド, 稲田八重子訳: 看護の探究, 東京: メヂカルフレンド社, 1964.
- 11) W.デーモン, 山本多喜司訳: 社会性と人格の発達心理学, 京都: 北大路書房, 1990.
- 12) 遠藤辰雄: アイデンティティの心理学, 京都: ナカニシヤ出版, 1993.

